

# 「聞くこと」に着目したパブリック・スピーキングの研究

—アメリカ合衆国教科書との比較を通しての考察—

米田 猛・山田 範子

# 「聞くこと」に着目したパブリック・スピーキングの研究

—アメリカ合衆国教科書との比較を通しての考察—

米田 猛・山田 範子\*

## The Study of Public Speaking Focusing on Listening [Comparison of the Textbook in USA]

Takeshi KOMEDA, Noriko YAMADA

### 摘要

パブリック・スピーキングは、スピーチの完成形として、現行中学校教科書5社のすべてが第3学年で取り上げている単元である。しかしながら、日本の教科書におけるパブリック・スピーキングは「聞くこと」の視点からの記述が存在せず、不完全であり、「話すこと」の視点の記述に片寄っていると云わざるを得ない。

パブリック・スピーキングは、一人の話し手が多数の聴衆に向けてスピーチをする「独話」であることから、一見、「話すこと」の学習のようだが、アメリカ合衆国の教科書では「話すこと」と「聞くこと」の双方向の活動として捉えられ、特に「聞くこと」を重視している。

本稿では、アメリカと日本の国語教科書におけるパブリック・スピーキングについての認識の違いを検証する。そして、アメリカの教科書から日本の中学生の学習にふさわしい情報を抽出し、「聞くこと」に着目した新しいパブリック・スピーキングの在り方を考察する。

**キーワード** : パブリック・スピーキング, アメリカ合衆国教科書, 聞くこと, 中学校国語科, 批判的思考力

**Keywords** : Public Speaking, The Textbook in USA, Listening, Japanese Language in Junior High School, Critical Thinking

### 1 問題の所在と本稿の目的

日本の中学校国語教科書の記述には、パブリック・スピーキング成立に関して、欠けている点が存在している。それは、パブリック・スピーキングの単元内に「聞くこと」の能力や態度の育成が全く位置づけられていない点である。

日本の現行中学校教科書では、すべての出版社が第3学年でパブリック・スピーキングの単元を設定し、卒業後の社会で活用できる表現スタイルとして重視していることが推察される。しかし、アメリカの教科書と比較すると、日本の教科書におけるパブリック・スピーキングの捉え方が不完全で片寄りのあることが明らかになった。つまり、日本のパブリック・スピーキング単元は、人前で「話すこと」に限定した認識で記述され、「聞くこと」に対する視点が欠けているのである。

パブリック・スピーキングは、一人の話し手が多数の聞き手の前で話すという「一対多」の「独話」の形態をとる。西尾実は『言語生活の探究』<sup>1</sup>において、「独話とは、話し手と聞き手とが一対一もしくは一対多で、その話し手はいつも話し手、聞き手はいつも聞き手になって

いる。」と定義している。日本の教科書におけるパブリック・スピーキングでは、この定義中の「話し手はいつも話し手、聞き手はいつも聞き手」という部分を表面的に捉えてしまっていると考えられる。話し手だけがアクティブな存在であり、聞き手は表舞台に出ることのない受動的な存在とみなしている。このため、日本の教科書では「話すこと」だけを取り上げ、「聞くこと」を記述していないのではないかと考えられる。

一方、アメリカ合衆国のパブリック・スピーキングの単元では「Speaking」と「Listening」の双方向の働きを重視している。「Listening」の章を設け、聴衆の聞き方を具体的に示し、パブリック・スピーキングの成立に「聞くこと」が欠かせないことを示している。アメリカのパブリック・スピーキングでは、聴衆の一人ひとりが能動的な聞き手であり、聞き手も「思考する表現者」として捉えられているのである。

本稿は、パブリック・スピーキングにおけるこのような両国の教科書における認識の違いを検証し、アメリカの教科書から日本の中学生の学習にふさわしい情報を抽出することを目的としている。そして、抽出した情報を基に、「話すこと」と「聞くこと」双方向の活動を取り

\* 富山大学人間発達科学部附属中学校非常勤講師

入れたパブリック・スピーキングの新しい単元の在り方を考察する。

## 2 日本の中学校国語教科書における「聞くこと」の認識

パブリック・スピーキングの単元内に「聞くこと」の記述がないことは既に述べたが、教科書全体では「聞くこと」の記述がどのようになっているのか調査した。

表1は、現行中学校教科書5社の「話すこと・聞くこと」に関する記述について、内容と頁数を調査したものである。【東京書籍】の系統を基準に、「話すこと・聞くこと」領域の単元を「話すこと」と「聞くこと」に分類した。

調査の結果、4社が「聞くこと」を本編で取り上げていたが、内容・ページ数ともに片寄りがあった。【教育出版】は、五社の中で唯一「聞くことは表現である。」と明記している。さらに、資料編で「メモの取り方」を特記し、本編でも「聞くこと」のスキルを詳しく解説している。しかし、「聞くこと」の単元が「話すこと」の単元と切り離されて記述されているため、せっかくの学びが実生活に生かされないのではないかと考えられる。

【教育出版】以外の4社では、「聞くこと」の具体的なスキルは示されていない。スピーチを聞いて、内容をどれだけ正確に把握できたかという、受容的態度としての「聞くこと」とその発展にとどまっていた。このことから、聞き手は、話し手の「話すこと」を受けるだけの受動的な存在であり、「聞くことも表現である」とは考えられていないことが推測される。

このように、日本の教科書における「聞くこと」の認識に関する問題点は、「話すこと」の単元と切り離されていて実生活に結びついていない点と受動的な非表現者として捉えられている点の2点であると考えた。

## 3 アメリカ合衆国の教科書における「聞くこと」の認識

アメリカのパブリック・スピーキングの教科書における「聞くこと」の認識を確かめるため、内容的に判断して中学校・高等学校・大学で使用していると考えられる2社の教科書を調査した。アメリカで多くのシェアを占める Houghton Mifflin Harcourt 社の『Speaking your way to Success』<sup>2</sup>と、臼井直人<sup>3</sup>、狩野みき<sup>4</sup>らがアメリカのパブリック・スピーキングの第一人者として注目している Stephen Lucas の最新の著書『The Art of Public Speaking 12e』<sup>5</sup>より、「聞くこと」の重要性と問題意識を示す表現を抽出した。

“Nature has given to man one tongue, but two ears, that we may hear from others twice as much as we speak.” —Epictetus

「神は、話すよりも二倍多く聞くために人間に一つの舌と二つの耳を与えられた」—エピクテトス

- Reading, writing, and speaking are taught in schools. Yet listening — the skill that takes about 45 percent of our communication time — isn't. Listening is a skill you must master.

「読むこと」・「書くこと」・「話すこと」は学校で教えられている。しかし、コミュニケーションの45%を占めている「聞くこと」は教えられていない。聞くことのスキルは、特に習得する必要がある。

- Most people are poor listeners. Even when we think we are listening carefully, we usually grasp only half of what we hear.

多くの人は、聞くことが下手である。話を注意深く聞いているつもりでも、たいてい半分くらいしか把握できていない。

- Regardless of your profession or walk of life, you never escape the need for a well-trained ear.

人は、職業や生活分野に関係なく、よく耳を訓練しておくことから逃れることはできない。

- The art of listening can be helpful in almost every part of your life.

This is not surprising when you realize that people spend more time listening than any other communicative activity — more than reading, more than writing, more even than speaking.

「聞くこと」の技術は、人生のいろいろな場面で役に立つ。

あなたは、他のどんなコミュニケーションよりも—「読むこと」「書くこと」それに「話すこと」よりも—「聞くこと」に最も多くの時間を費やしていることに気づいても、驚かないだろう。

- An excellent way to improve your own speeches is to listen attentively to the speeches of other people. Over and over, instructors find that the best speakers are usually the best listener.

あなた自身のスピーチを改善する優れた方法は、他の人のスピーチに聞き入ることである。重ね重ねになるが、最高の話し手というのは、たいてい最高の聞き手なのである。

このことから、アメリカの教科書では、パブリック・スピーキングにおいて、「話すこと」よりもむしろ「聞くこと」の方を意識的に扱うべきであると認識していると考えられる。また、「話すこと」と「聞くこと」を表裏一体の関係と捉えていると推察できる。

これに加えて、アメリカの教科書では、「聞くこと」が批判的思考力と関連していることにも言及している。批判的思考とは「他人の論理の中の弱点を指摘することができ、その指摘を自分の論理に生かすことである。」<sup>5</sup>として、批判的思考を構築するためには、能動的に「聞くこと」が必要であると説明している。

批判的思考力にかかわる「聞くスキル」には、以下のことが記されている。

- summarizing information  
(要約する)
- recalling facts  
(事実を整理する)
- distinguishing main points from minor points  
(要点を見つける)
- separating fact from opinion  
(事実と意見を区別する)
- spotting weaknesses in reasoning  
(論理の弱点を見つける)
- judging the soundness of evidence  
(信頼性を審査する)

「要約」や「事実と意見を区別すること」は、日本でも「書くこと」「読むこと」のスキルとして定着しているが、アメリカのように「聞くこと」でそのスキルを使用し、批判的思考力と結びつけるという考え方は存在しないだろう。

以上のことから、日本のパブリック・スピーキングにおける「聞くこと」の認識はHearing（ただ単に音を認識する聞き方）に近いのが現状である。アメリカのように、話し手と聞き手を表裏一体の関係として捉え、Listening（聞き手が学習に至る聞き方）すること、つまり、「聞くこと」は話し手に対する礼儀や、義務感から仕方なく行うのではなく、聞き手本人のために行う思考活動・表現活動であると認識することが肝要であると考えられる。

#### 4 日本の教科書におけるパブリック・スピーキングの位置と課題

次ページ表1のように、「話すこと」を「独話」「対話」「会話」に分類して5社を比較してみると、「会話」に関する単元が最も多いことがわかった。「会話」に関する単元では、学級全体で活発な表現活動を行うことができるというメリットがある。しかし、実生活を考えたとき

に、パネルディスカッションやディベートといった特殊な話し合い活動よりも、むしろ「独話」で話し手になったり、聞き手になったりすることの方が多くはないか。その中でも、「独話」を「聞くこと」の頻度が最も高いと考える。

「独話」について注目する点は、パブリック・スピーキングをすべての出版社が第3学年で取り上げていることである。【東京書籍】、【教育出版】、【光村図書】の単元名・教材名には別の名が記されているが、内容から判断してパブリック・スピーキングと考えられる。

第1学年で「スピーチ」、第2学年で「プレゼンテーション」と段階的に経験した後に、「パブリック・スピーキング（条件を踏まえたスピーチ）」として全社が本編で記述している。パブリック・スピーキングをスピーチの完成形として捉え、卒業後の社会で活用できる表現スタイルとして重視していると考えられる。

表2は、現行教科書5社のパブリック・スピーキングに関する記述についての比較を行い、それぞれの特徴を考察したものである。

【三省堂】の単元名に「聞くこと」が含まれているが、グループ活動での「聞くこと」であり、聴衆の一員としての「聞くこと」と捉えることはできないと考えた。従って、パブリック・スピーキングの「聞くこと」の学習にはあてはまらないと判断した。他の4社は、「聞くこと」に関する記述が全くなかった。

以上のことから、教科書5社すべてが、パブリック・スピーキングを一方向的に話し手の視点でのみ捉えていることが明らかになった。

パブリック・スピーキングは、決して話し手だけのものではない。聞き手がいるからこそ成立することに加え、聞き手の頭の中では活発な思考活動がある。また、今回の聞き手は次回には話し手になるといったように、批判的思考をしながら「聞くこと」は、自分自身の「話すこと」に通じている。従って、パブリック・スピーキングの学習に聞き手の視点がないこと、聞くスキルがないことは非常に根本的で重大な問題であると考えられる。

「話すこと」のスキルに関してもいくつかの問題が考えられる。まず、教科書に記述されているのはスピーチを行うにあたっての心構えであり、具体的にどのようなことをすればよい話し手になれるのか全く示されていない。また、パブリック・スピーキングの原稿（メモ）を作成するなど構成面に重点を置きすぎていて、実際に話すことの十分な練習をすることなく発表に至るような内容になっている。発表に関しても、フィードバックの仕方の記述がなく、評価のポイントなども示されていないことから、とにかく人前で話すことに意義を見出しているように考えられる。

敬語の使用がパブリック・スピーキングに組み込まれている点にも疑問がある。これは、第3学年の指導事項「イ場の状況や相手の様子に応じて話すとともに、敬

表1 「話すこと・聞くこと」に関する記述

(数字は頁数)

		出版社	東書			学図			三省堂			教出			光村				
		学年	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3		
話すこと	スキル	発音・発声																2	
		話し方の工夫		3	3	3				6	6	2							
		話題の決定								2	2	2	2	2	2	3	3	2	
		敬語の使い方			2	2						2						3	
		発表の方法, 工夫									4		1	1	1	1			3
	独話	話し合いの方法			2	2				2	2	2	1	1	1	1	1	1	4
		スピーチ (自己紹介, 友達紹介)		7			7			6		4				5			
		プレゼンテーション			7		7			6		6			6			4	5
	対話	パブリック・スピーキング※				7			14			6			4				4
		対話, インタビュー					10												5
	会話	対話劇										4							5
		話し合い, 会議		6		6						6	7	7	6				5
		討論ゲーム								4									
ディベート							10												
パネルディスカッション				6				8		6								5	
ポスターセッション																	6		
聞くこと	バズセッション																4		
	メモの取り方		1									1							
	正確に聞く								6			4				1			
	整理・吟味して聞く		3	3						6			4				1		
	評価して聞く (自分の表現に生かす)				3						6			4				1	

※東書は「場面に応じて話そう」条件スピーチ  
 教出は「場をふまえて効果的に話す」  
 光村は「自分の魅力を伝えよう」

東書……東京書籍『新しい国語』  
 学図……学校図書『中学校国語』  
 三省堂……三省堂『中学生の国語』  
 教出……教育出版『中学国語 伝え合う言葉』  
 光村……光村図書『国語』

表2 パブリック・スピーキングに関する記述

出版社	東書	学図	三省堂	教出	光村
単元名	場面に応じて話そう	世界に届ける言葉	課題をもって話そう・聞こう	場をふまえて効果的に話す	自分の魅力を伝えよう
教材名	条件スピーチ	パブリック・スピーキング	パブリックスピーチをしよう	自分の思いを語る(スピーチ)	記者会見型スピーチをする
目標	①経験や知識を整理し, 目的や相手, 時間を意識し, 話す内容や話し方を考える。 ②敬語を適切に使い, 場の状況や相手に応じた話し方をする。	①「聞き手の心に届く話し方」の条件について考える。 ②パブリック・スピーキングをしよう。	①相手や場に応じた内容を考え適切な言葉遣いで話す。 ②聞き取った内容や表現の仕方を, 自分の表現にいかす。	①条件や場に適した組み立てや表現の工夫を考える。 ②敬語を適切に使う。 ③三年間を振り返り, すすんで自分を語る。	①聞き手の求める情報を的確に捉え, 自分の経験や知識を整理して話す。 ②聞き手の反応に応じて説明や話し方を工夫する。
内容	①自分の体験を振り返って話す材料を集める。(ウェブページ) ②場面に応じた内容や話し方を考える。 A 学区の小学生に体験学習をPRする。 B 体験先でお世話になった方々に報告や提案をする。 C 体験を通して考えたことを面接で述べる。 ③スピーチの練習をする。 ④スピーチを発表し, 意見を交換し合う。	①意見文とパブリック・スピーキングの原稿を比較する。 ②関心のあることについて400字程度の意見文を書く。 ③パブリック・スピーキングの原稿を作成する。 ④パブリック・スピーキングをする。 ⑤パブリック・スピーキングを振り返ろう。	①条件をはっきりさせる。(例) 新入生の保護者への説明会で, 三年生代表として四人が, 中学校の生活を, 体育館で三分間ほどで紹介する。 ②テーマや話題を決める。 ③スピーチメモをつくる。 ④スピーチをする。	①公の場で三年間をしめくくる話をしよう。(町内の子ども会の代表として, 地域のかたがたを前にスピーチすることになった例より表現の工夫を読み取る。) ②自分の進路について語ろう。(自分の志を, 進学希望先の先生がたに発表することになった例より, 構成の仕方を考える。)	①自分をアピールする場とその目的を考えよう。 ②話題を選び, 会見名を考えよう。 ③話す内容を整理し, 質問に備えよう。 ④記者会見を開こう。
特徴	ウェビングという発想の方法が紹介されており, スピーチの構想を考える具体的方法が示されている。一分間と二分間でそれぞれスピーチをまとめるという練習を紹介しており, 五社の中で, 唯一時間内でスピーチを行うことを条件としている。発表後, 良かった点や工夫されていた点だけを意見交換し, ポジティブな評価を求めている。スピーチスキルは心構えどまりで具体的な方法が示されていない。	五社の中で, 最も詳しく説明されている。「キング牧師の演説」と「リオの伝説のスピーチ」が例で示されていることもあり, 記載頁数が最多である。ただ, この二例は, 文面だけの紹介であり, また, 英語を日本語訳したもので, 本来のものは少し雰囲気異なる。また, 音声の紹介があったとしても使用言語の違いから, 日本の中学生のパブリック・スピーキングのヒントとしてはわかりにくい。	スピーチメモ(構成メモ)を作成する手順が詳しく示されている。スピーチよりも準備を重視している。スピーチスキルに関しては, スピーチをするにあたっての心構えが示されているだけで, 具体的なヒントが全くない。スピーチはグループごと, 話し手・聞き手の役割を入れかえて行う方法がとられている。グループ内だけのスピーチでは「大勢の前で行う」ことにはならず, パブリック・スピーキングの学習としては弱い。	パブリック・スピーキングの原稿例をもとに, 表現と構成に分けて解説している。それぞれ詳しく解説しているが, 実際にパブリック・スピーキングの内容を考える時には手がかりが薄い。実際に行うパブリック・スピーキングは生徒まかせで, 相互評価などで振り返ることを予定していない。敬語は, 尊敬語と謙譲語の使い分けを指導しているが, パブリック・スピーキングの内容との関連性は薄い。	対話型パブリック・スピーキングの単元である。場面や相手に応じた話題・話し方を考える点の説明が詳しくされている。自己アピールだけでなく, 記者として友達の魅力を引き出す質問を考えるなど相手理解を強化する内容になっている点が評価できる。しかし, 生のやりとりでは大変高度なそれ即興力が必要であり, 教科書の内容だけでは適切な指導を行うことは難しい。

語を適切に使うこと。」を意識したものと考えられるが、相手の心に言葉を届けるときに、必ずしも敬語を使うことが効果的であるとは考えにくい。使うべき所に敬語を使用することはもちろん大切であるが、それよりも言葉づかいそのものを条件として考えるべきではないか。

さらに、白井直人<sup>3</sup>はパブリック・スピーキングのフォーマルな構造について言及していることから、筆者は、どのような状況においても、聴衆に否定的な感情がおこらないようなフォーマルな言葉づかいとして、共通語の使用を条件に加えるべきであると考え。ただし、共通語の使用は強制するものではなく、共通語の使用を意識した上で、多少、言葉遣いに揺れがあっても、心から出た自分の言葉を使ってスピーチするよう指導すべきであると考え。

## 5 パブリック・スピーキングの定義

『The Art of Public Speaking 12e』<sup>5</sup>によると、パブリック・スピーキングと日常会話との違いについて説明する中で、パブリック・スピーキングの定義を以下のように言及している。また、パブリック・スピーキングと「批判的思考力」との関係について、次のように述べている。

- ① Public speaking is more highly structured.  
パブリック・スピーキングは、より高度に構造化されている。
- ② It usually imposes strict time limitations on the speakers.  
パブリック・スピーキングは、通常厳しい時間制限が課されている。
- ③ Public speaking demands much more detailed planning and preparation than ordinary conversation.  
パブリック・スピーキングは、日常会話よりも非常に詳細な計画と準備を必要とする。
- ④ Public speaking requires more formal language.  
パブリック・スピーキングは、正式な言語を必要とする。
- ⑤ Public speaking requires a different method of delivery. When conversing informally, most people talk quietly, interject stock phrases such as “like” and “you know”, adopt a casual posture, and use what are called vocalized pauses (“uh,” “er,” “um”). Effective public speakers, however, adjust their voices to be heard clearly throughout the audience. They assume a more erect posture. They avoid distracting mannerisms and verbal habits.

パブリック・スピーキングは、日常会話とは異なる表現方法を必要としている。普段の会話では、“like”や“you know”といったカジュアルな言葉の使用や、“uh,” “er,” “um”などの小休止がある。しかし、魅力的なパブリック・スピーカーは、聴衆に合わせて言い方や声量を調整する。姿勢を正す。また、聴衆の気が散るような身振り手振りや言葉の癖を回避するよう努めるものである。

- ⑥ One of the ways listening can serve you is by enhancing your skills as a critical thinker. Critical thinking helps you organize your ideas, spot weaknesses in other people's reasoning, and avoid them in your own.

「聞くこと」は、批判的な考え方を持つ思想家としてのスキルを育てる。批判的な思考ができれば、自らの思考を構築できる。また、他の人の推論の弱点を発見することを通して、自らの論理の矛盾にも気づくことができる。

一方、日本では、パブリック・スピーキングを以下のように定義している。

『音声言語指導大辞典』(1999)によると、「聴衆の前で行われるスピーチ。話者と聴衆という役割分担があらかじめ明示的になされていることが定義的特徴である。」<sup>6</sup>「話し方の一つ。公衆に対して効果的に話す技術としてこれをとらえる傾向がみられる。」<sup>7</sup>としている。

ヒルマン小林恭子・深澤のぞみ<sup>8</sup>によると、「ある程度あらたまった場所で、一人の話し手が、対象となる複数の聴衆に、自分の責任において、自分の考えを理論的にまとめて伝えようとする。」と定義していて、河野義明<sup>9</sup>はこの定義に「一定の時間で行う」ことを付け加えている。

このように両国のパブリック・スピーキングの定義を比較してみると、日本の定義には「批判的思考力」に関するものが存在しないことが明らかである。このことは、日本のパブリック・スピーキングの視野に「聞くこと」が入っていないことを意味している。

さらに、アメリカの「批判的思考力」とは「他の人の推論の弱点を発見することを通して、自らの論理の矛盾に気づく」ための力としているところに注目したい。つまり、アメリカでは相手の弱点を突いて攻撃することを「批判的思考力」と言っているのではない。あくまでも、聞き手自らの思考を構築するための力と捉えているのである。

## 6 アメリカ合衆国教科書による「聞くこと」のスキル抽出

『Speaking your way to Success<sup>2</sup>』より、Developing Active Listening Skills として紹介されている項目の中から、日本の中学生にふさわしい具体的なスキルを抽出した。

- ① Send the right body language.  
適切な身体表現をしよう。
  - Remain at the speaker's eye level or lower, if Possible.  
聞き手は、話し手と同じ目線か、話し手よりも目線が下になるようにしよう。
  - If you're sitting, sit up straight or lean forward slightly to show your attentiveness.  
座っているとき、聞き手は注意力を示すために、まっすぐ体を起こすか、わずかに体を前に傾けるようにしよう。
  - Maintain eye contact to the degree that both you and the speaker are comfortable.  
快適な程度にアイコンタクトを維持しよう。
- ② Listen with empathy. That means listening with your ears, your eyes, and your heart.  
感情移入しながら聞こう。耳や目だけでなく、ハートで聞こう。
- ③ Show you're listening and understanding the message.  
メッセージを聞いていること、理解していることを表現しよう。
  - Face the speaker squarely.  
話し手と真正面に向き合おう。
  - Nod your head up and down to signal agreement; nod it sideways to signal disagreement.  
合意できるときにはうなずき、自分と意見が異なるときは首を横に振ろう。
  - Smile to signal agreement.  
微笑みは合意のサインであることを意識しよう。
  - Raise your eyebrows to say *Really? or That's Interesting*.  
「本当に？」というときや、「おもしろい」と

興味を喚起されたときには眉を上げて表現しよう。

- Utter the word I *see, mmmm, right*.  
納得できる時には「うーん」と言ってみよう。
- ④ Offer positive encouragement.  
話し手に対して明確な励ましをしよう。
    - Give speakers the space they need with attentive silence. Sit quietly and patiently through pauses or uneasiness.  
話し手が言葉につまり、沈黙があっても、静かに根気強く座ってよう。
    - Resist the urge to give advice unless asked.  
求められない限り、話し手にアドバイスしないようにしよう。
  - ⑤ Don't interrupt.  
スピーチの最中に話に割り込まないようにしよう。
    - Even if the speaker is launching a negative attack against you, wait until he's finished to defend yourself. Listen carefully so you can plan your rebuttal.  
たとえ話し手が攻撃的であっても、話に割り込まずに、スピーチが終わるまでに反論を考えておこう。
  - ⑥ Ask questions and paraphrase.  
質問をしよう。言い換えてみよう。
    - Active listening means asking questions to clarify salient points.  
論点をはっきりさせるために質問をしよう。
    - Question from a position of goodwill and mutual goals.  
平和的なゴールを見据えた質問をしよう。
  - ⑦ Take Notes. Simply ask: *would you mind if I take notes?*  
ノートをとろう。事前に、話し手に「ノートをとってもかまわないか」聞いてみよう。
  - ⑧ Copy the body language of the person you're speaking with. If he's sitting back with his legs crossed, do the same. When you

mirror the body language of the speaker, he will subconsciously understand that you're listening.

相手を注意深く見て、Body language のまねをしてみよう。話し手が足を組んでいたなら、聞き手も組んでみよう。鏡のように行動するとことで、話し手は潜在意識において熱心に話を聞いてもらっているように感じる。

また、『The Art of Public Speaking 12e』<sup>5</sup>には、パブリック・スピーキングでの Listening Self-Evaluation(聞き手の能力評価表)が紹介されている。Habit(聞き手の習慣)を問う内容であるが、「聞くこと」のスキルとして応用可能であると考え、10項目の中から7項目を抽出した。

- ① Giving in to mental distractions.  
→精神的に気が散らないように努めよう。
- ② Giving in to physical distractions.  
→身体的に気が散るような行為を避けよう。
- ③ Rejecting a topic as uninteresting before hearing the speaker.  
→スピーチを聞く前に、面白くないと決めつけ、拒絶することのないようにしよう。
- ④ Faking paying attention.  
→頭で考えない「見せかけの注意深さ」は必要ない。考えながら聞こう。
- ⑤ Jumping to conclusions about a speaker's meaning.  
→話の途中で、結論を急がないようにしよう。
- ⑥ Deciding a speaker is wrong before hearing everything she or he has to say.  
→話し手が「間違っている」と決めつけないようにしよう。
- ⑦ Judging a speaker on personal appearance.  
→話し手を見た目で判断しないようにしよう。

日本でも、このような具体的な「聞くこと」のスキルを示し、このスキルに沿って自己評価できるまで「聞くこと」のレベルを高めなければならないと考える。

ところで、これらアメリカ合衆国2社の教科書に共通するスキルは、やはり「思考」と「表現」に関わるものである。

「思考」に関しては、先入観で判断することや、攻撃的な考えを避けることを重視していると考えられる。話

し手を受け入れることからスタートして、平和的なゴールを見据えた「批判的思考力」が求められていると解釈できるだろう。

「表現」に関しては、メッセージを受け取っていることや話し手を励ますためのスキルを紹介することで、聴衆の一員としての聞き手であってもアクティブに「表現」できることを意識づけていると考える。また、話し手に感情移入し、ハートで聞こうと努力する結果、聞き手自身の自己表現が自然と発揮されることも予想できる。

## 7 アメリカ合衆国教科書より「話すこと」のスキル抽出

『Public speaking—A Student Guide—』<sup>10</sup>では、パブリック・スピーキングにおける「話すこと」を成功させるための7つのステップが具体的に紹介されている。以下に抽出した要点を示す。

- ① Choose your topic. First, choose a topic that interests you. Know what you are trying to accomplish with your presentation. Are you trying to educate, convince, entertain, or demonstrate?  
聴衆に応じた話題を選ぼう。まず、話し手自身がおもしろいと思うものを選ぼう。プレゼンテーションのゴールを考えよう。スピーチを聴衆に届け、納得させ、楽しませ、証明するのである。
- ② A great opening line will grab the attention of your audience.  
聴衆の心をつかむ始め方を考えよう。
- ③ Good endings help your classmates remember what you said.  
記憶に残る終わり方を考えよう。
- ④ Show off with visual aids.  
視覚資料を提示しよう。
- ⑤ Pull your audience in!  
スピーチに聴衆を参加させよう。
  - Ask questions.  
聴衆に質問してみよう。
  - Make eye contact.  
聴衆とアイコンタクトをとろう。
- ⑥ Speak like a pro.  
プロのように話してみよう。
  - You should use a note card to remind you of what to say.



言いたいことを忘れないように、スピーチの要点を記入したカードを準備しよう。

- Practice by yourself in front of a mirror. Practice for your family at home or ask a friend to listen to you.

鏡の前、家族の前、友達の前で練習しよう。

- Add gestures and movements.

ジェスチャーを交え、動きを加えて話そう。

- Practice speaking loudly and clearly. Look at your listeners and smile.

大きく、はっきりとしたスピーチをする練習をして、会場に声を届けよう。聴衆を見渡し、笑顔を見せよう。

- Dress for success.

成功のために、身なりを整えよう。

#### ⑦ Build your confidence.

自信をつけよう。

- If you have prepared for your talk with lots of practice, good note cards, and exciting visualaids, you will do a super job.

スピーチの前に十分な準備をしよう。練習し、カードや視覚資料の準備を行えば、素晴らしいスピーチになるだろう。

- Before you begin, look your audience in the eye and smile at them. Taking a second to look at them will relax you and put you in charge of the situation.

スピーチをはじめる前に、聴衆の目を見て微笑もう。聴衆とアイコンタクトをすればかえってリラックスできる。

このように、アメリカの教科書における「話すこと」は、日本とは異なり非常に具体的である。

日本の教科書では、パブリック・スピーキングにおける「話すこと」の具体的なスキルを紹介せず、スピーチの心構えだけで進めている。このため、確かな学びがなく、社会に出た後も、スピーチというと、聴衆を「かぼちゃ」と考えて、自分の言いたいことだけを言って速く壇上から去りたい気持ちになってしまう。意識が話し手自身にして向いていなければ、聴衆はそのスピーチに興味・関心を示すことは難しいだろう。従って、日本の聴衆が受動的であるのは、話し手のこのような現状に起因しているとも考えられる。

一方、アメリカでは、徹底した聴衆分析を踏まえた上

で、聴衆にとって有益なスピーチを行う努力を促している。この点が日本と大きく異なる。また、万全な準備を行うことや緊張をほぐす具体的な方法を紹介することで、自信を持ってスピーチすることを重視している。このような視点も日本の教科書には見られなかった。

パブリック・スピーキングは、『音声言語指導大辞典』の定義の一つにあるように「効果的に話す技術」であることを今一度考え直す必要がある。アメリカのように、聴衆の心に言葉を届けるスキルを紹介し、自分なりのスピーチの形を構築できるように「話すこと」の視点においても改善していかなければならない。

## 8 結論

両国の教科書を比較した結果、アメリカのパブリック・スピーキングにおける「聞くこと」は、「話すこと」と同様あるいはそれ以上に重視されているのに対して、日本では圧倒的に「聞くこと」の意識が薄いことが明らかになった。また、そもそも日本の教科書における「聞くこと」は、「話すこと」と切り離されて記述されていて実用的でない上に、「思考」や「表現」とも結びついていなかった。パブリック・スピーキングの定義を比較しても、アメリカは「批判的思考力」を育てるという「聞くこと」の視点を取り入れているのに対し、日本は話し手の立場からの言及のみで、「聞くこと」の視点を含めていない。

つまり、日本のパブリック・スピーキングにおける「聞くこと」（聴衆としての聴き方）はHearing（ただ単に音を認識する聞き方）であるから、パブリック・スピーキングの教科書単元に「聞くこと」の視点が入っていないと考えられる。

アメリカのように、パブリック・スピーキングにおける聞き手（聴衆の中に埋もれている一人）であっても「思考する表現者」と認識することが大切であり、日本人は「聞くこと」の意識を変えていかなければならない。

アメリカのように、パブリック・スピーキングでの「聞くこと」においても「話すこと」と同様に具体的なスキルを示すことが必要である。また、パブリック・スピーキングの学習は「話すこと」と「聞くこと」を同時進行で行い、それぞれ具体的なスキルをもとにした双方向の活動を通して、段階的に進めていかなければならないと考える。

中でも、今まで全く意識していなかった「聞くこと」を切り口にしてパブリック・スピーキングを捉えることで劇的な変容をもたらす可能性がある。従って、日本における新しいパブリック・スピーキングの単元開発の第一歩は「聞くこと」に着目することであると考える。

## 9 パブリック・スピーキングの新しい単元開発に向けての考察

パブリック・スピーキングの「聞くこと」に着目することで、アメリカでの認識と同じように、聞き手も「思考する表現者」であることを実感できる単元開発を行いたい。そのために、「話すこと」と「聞くこと」が同時進行し、その双方向性を確認できる状況を作る必要がある。

いきなり一対多で双方向性を確認することは難しいため、ここでも段階的な措置が必要になると考える。まず、確実に双方向のコミュニケーションができる「対話」を経験させたい。目の前にいる話し手と「対話」する状況では、聞き手はアクティブにならざるを得ない。話し手に何か言葉を返すためには、聞き手の中に「思考」が必要になり、「思考」するためには話し手に感情移入して、心で言葉を受け止めなければならない。言葉を受け取ろうと必死になれば、自発的に話し手に体を向け、目を見て話を聞き、納得したときにはうなずくといった「表現」が生まれると考える。また、「対話」をする中で、相手にとってプラスになる言葉をかけてあげたいというアメリカ的な「批判的思考力」が育成される可能性もある。

このように、「対話」でのアクティブな聞き方、前向きな批判に基づく「思考」と相手の言葉を受け取るときに生じる「表現」を実感すれば、「聞くこと」に対する意識の変容が起こると考える。

このような聞き方を、パブリック・スピーキングの聴衆に拡大して実践を行いたい。つまり、聴衆の中の一人となったときでも、「対話」での聞き手と同じように「思考する表現者」になれることを実感させる単元開発を行う。

アメリカの教科書にあるように、「話すこと」と「聞くこと」がともに効果的なパブリック・スピーキングを追求するため、まずは「聞くこと」に着目することで聴衆の意識を変容させる実践は別稿にゆずる。

## 文献

- 1 西尾実『言語生活の探究』(岩波書店,1961)
- 2 Sheryl Lindsell-Roberts, *Speaking Your Way to Success* (Houghton Mifflin Harcourt, 2010)
- 3 白井直人『学校における日本語パブリック・スピーキング教育への提言:「多様な言語観」に根ざした教育方針の重要性』(Speech Communication Education) vol.15(2002), pp.1-11.
- 4 狩野みき『自分の考えを「伝える力」の授業』(日本実業出版社, 2014)
- 5 Stephen E.Lucas, *The Art of Public Speaking, TWELFTH EDITION* (McGraw-Hill Education, 2014)
- 6 高橋俊三『音声言語指導大辞典』(明治図書, 1999)「パブリック・スピーキング」の項 柳沢浩哉
- 7 高橋俊三『音声言語指導大辞典』(明治図書, 1999)「パブリック・スピーキング」の項 藤森裕治
- 8 ヒルマン小林恭子・深澤のぞみ『日本語のビジネススピーチの特徴と日本語教育への活用の可能性』(JSAA-ICJLE2009 日本語教育国際研究大会(オーストラリア ニューサウスウェールズ大学) 予稿集) (2009) 2012, p.123.
- 9 河野義章『パブリックスピーキング・スキルの研究—対話をイメージさせる要因—』(昭和女子大学生生活心理研究所紀要 16,2013,pp.95-102.)
- 10 Katherine Pebley O'Neal, *Public speaking—A Student Guide—7 Steps to Writing and Delivering a Great Speech* (Prufrock Press Inc, 2005)

(2015年8月24日受付)

(2015年9月25日受理)

